



愛知淑徳大学

# ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

## Newsletter

第2号

発行年月日：1996年10月31日  
〒480-11 愛知県愛知郡長久手町長湊片平9  
Phone 0561-62-4111 EX 498  
FAX 0561-63-9308  
E-mail: LDY 01437 (@niftyserve.or.jp)

ジェンダー・女性学研究所では、今年度、文部省から事業の委嘱を受け、愛知県、及び愛知県教育委員会と共催でジェンダー・女性学セミナー ～青年男女の共同参画をめざすために～を実施中である。

青年男女の共同参画学習を進めるにあたっては、男女共同参画を知識として認識するだけでなく、身近な生活課題として位置づけることが重要である。この事業は、そのために態度や行動の変化につながるようなきっかり作りを目的に実施するものである。また、大学における女性学関連授業の教育効果についての調査も実施した。

### ジェンダー・女性学セミナー ～青年男女の共同参画をめざすために～ 調査と事業をただ今実施中！！

この事業の全体は、以下の3つの事業からなっている。

**S 学生の意識調査** ジェンダー・女性学関連講座履修者の履修事前・事後及び非履修者の意識調査を行い、これらの講座が青年男女の意識、態度変容に及ぼす影響について比較分析する。今後の教育方法の開発に役立てることを目的とした調査である。調査は既に実施され、現在分析が進行中である。

**S 男女共同参画のための教育ガイドラインの作成**  
学生の意識調査からの結果、公開集中講座、ワークショップ、シンポジウムの結果や参加者の意見、感想のモニタリング等諸結果を資料化し、それをふまえてガイドラインを作成する。

### S 公開集中講座、ワークショップ、シンポジウムの開催

**\* ジェンダー・女性学公開集中講座（実施済み）**

大学等によるジェンダー・女性学講座の増加は顕著であるが教養、入門レベルにとどまっている。そこで、この公開集中講座では、ジェンダー論、女性学の基礎から、アドバンスト・レベルまでを3日間宿泊し集中的に行う。（9月5,6,7日に実施されたこの公開集中講座については2頁参照のこと）

**\* ワークショップ：青年男女の開発における役割**

～ジェンダーの視点～

国際化の進む中で、日本のアジアにおける位置を相対的に見ることによって我々がどのような形で国際交流や開発援助に関われるか等について、参加者がジェンダーの視点から考えられるようになることを目的に行う。（ワークショップの申し込みについては6頁を参照のこと）

**\* シンポジウム：**

「青年男女の共同参画をめざして」

男女共同参画を進めるためには男女が共に経済・生活自立をすることが基本である。そのためには男性の家事・育児への参加、女性の就労の推進が不可欠であるが、実態は厳しいものがある。

21世紀に向けてどのような意識改革が必要なのか、また青年男女も固定的な性別役割分業にとらわれずに個性ある生き方をつくるにはどのような方法があるのかを共に考えていきたい。

（シンポジウムの申し込みについては6頁を参照のこと）

## ジェンダー・女性学公開集中講座 (2泊3日) 開催される

### 全国から青年男女60名参加

9月5、6、7日の3日間、愛知県岡崎市の愛知県青年の家において、文部省委嘱事業のひとつである公開集中講座が「女らしさ・男らしさの神話からの解放をもとめて」をテーマに行われた。公開とあって、ジェンダーの問題に関心のある学生、社会人が総勢60名、遠く東京や神戸からも参加した。社会人は公務員、教員、自営業の方など13名(男性3名、女性10名)、学生は学部生、院生、留学生など47名(男性7名、女性40名)で、本学以外の学生もその三分の一を占めた。性や年齢だけでなく、異なる職業の人々や大学生・大学教員等が宿泊を共にしながら学ぶという経験は、参加した学生らには大変刺激的な体験になったようだ。

「ディスカッションの機会が少なかった」という声もあったが、グループワークやロールプレイング、あるいは夜の懇談会(?)などで自分の考えを語る場が多かったせいか、「自己表現の難しさ、大事さを痛感した」、「他の人から自分の気づかない視点を指摘され触発された」、「フェミニズムの考え方をおしつけられるのではなく、“自分で考えなさい”というメッセージを繰り返し受け取っていた」といった感想が、多くの参加者から聞かれた。その意味では、ジェンダーの問題の学習にとって集中講座というこの方法は、一定の効果があったものと言えよう。

☆9月5日

### 講義：女と男のビジュアル表現

— 映画・ビデオのジェンダー平等イメージ

講師 田上時子

(ビデオ・プロデューサー、ビデオドック社長)

田上氏が作成したビデオ等を見ながら、ジェンダー・フリーの映像とは何か(対象の扱い方、カメラアングルなど)、女性が作り手になることの意義、受け手側のメディアを読み解く力の必要性などを学んだ。

### グループワーク

夕食後、8つのグループに分かれ、それぞれ関心のあるテーマで話し合いをもった。職場における性差別やセクシャル・ハラスメント、「男女差別をなくすことは可能か」など初対面ながら活発な議論が行われた。

☆9月6日

### 講義：ジェンダーとは何か

講師 國信潤子(本学教授)

初学者にも理解できるように、ジェンダーとは何か、何がどう問題なのか、具体的にわかりやすく解説。特に「性による区別」が差別になりうること、性別役割分業の差別性、世界女性会議等について説明した。

### 講義とロールプレイ

#### 女と男の自己尊重 と自己主張

— 男女平等関係づくり

講師 加藤伊都子、渡辺ひろみ

(フェミニスト・カウンセリング課、カウンセラー)

実際に「自己尊重スケール」を使い、自分自身の自尊感情の高低を分析した。また、ロールプレイングを通じて、女性・男性のコミュニケーション様式の違い(女性の側に相手に合わせたり、相手の話を引き出したりする発言がみられた)に気づき、それが性別文化のなかでつくられていることを確認した。

### 学生による報告：

#### テレビCMの中のジェンダー

報告者 愛知淑徳大学 女性学・男性学研究会

☆9月7日

### 講義：家事「労働」はなぜタダなのか

講師 伊田広行(大阪経済大学教員)

家族(カップル)単位がなぜ出現してきたのか、カップル単位の意味は何か(まさに家事労働をタダでやらせる仕組み)、その問題性がどこにあるかを明らかにした上で、その解決の方向性として「シングル単位社会」を提言する。男性にとっても、女性にとっても、本当に生きやすいしくみとは何かを豊富な例でわかりやすく解説した。

### パネルディスカッション：

#### 女の経済自立・男の生活自立

パネラー 中西幸子(愛知県教育委員会生涯学習課)

太田ふみ子(椋山女学園高等学校教員)

塚本真衣子(本学学生)

春山勝(東洋大学大学院生・東京都職員)

コーディネーター 國信潤子(本学教授)

ジェンダーの問題、性差別の問題と自分自身の関わりについて話していただいた。行政や教育の場での課題が語られた後、若い二人からは、自分自身の中にあるつくられた規範に気づいたことが、ジェンダー問題に関心をもったきっかけであること、今後はそれを、生き方や仕事にどう生かしていくかが課題であることなどが語られた。



\*3頁参照

(右講義：「女と男の自己尊重と自己主張」のロールプレイをしているところ)

## 新運営委員雑感

渡邊かよ子

私の専攻は高等教育史であり、ジェンダーをめぐる学問については門外漢ですが、社会問題としてのジェンダーの重要性と、その根深さが教育と密接に関わっていることを鑑み、微力ではありますが、本年度より本研究所の運営委員に加わせていただくことになりました。

ジェンダーの問題に具体的な自らの問題として関心を持たざるをえないようになりましたのは最近のことで、「らしさ」の神話が男女を共に一個の人間としてより自由に生きることを阻んでいることを社会問題として認識するようになるまで長い時間がかかりました。今から思うとなぜこんなに能天気でいられたのか、自らの愚かさに怒りさえ感じます。問題意識の発酵過程には、米国の大学院で男女の自発的學生集団が授業中の教員の言動にジェンダー的観点から問題がなかったか定期的に点検する会合を持ち、それをきちんと教員に伝え改善を求める活動をしていたことに触れたことや、また、これまで子ども中心主義としてものではやされてきた新教育や近代教育学の在り方に認識論の視点から批判が向けられはじめた時期に学んだこと等があるように思います。

人間はそれぞれ異なる多様な属性と個性を持ち、ジェンダーの問題は最終的には排除や差別をめぐる社会問題の一部としてとらえられるべきものと考えます。単なる人間の差異や個性が、なぜ排除や差別に転換されていくのか、いかなる正当性を装って合理化され構造化され強化されていくのか、これらの解明には性別や階層や国籍等の属性や文化、権力関係を越える知性に基づく誠実な議論が必要と思われます。個人的責任が負えない事由による排除が正当化され不平等が強要されている社会現実、単に個人の努力不足にのみ起因するものではないことを意識化し、今日非現実と思われるようなことも今日という時代そのものが人類の歴史においてはほんの一瞬であることに思いをはせながら、傍観が容認や黙従に繋がることをこころしながら研究教育活動に精進できたらと考えています。

(言語文化研究所助教授)

## 愛知淑徳大学女性学・男性学研究会 モルガウ 活動報告

磯部美良

愛知淑徳大学女性学・男性学研究会（通称モルガウ）は、愛知県女性総合センター「ウィルあいち」のオープニングイベント参加をきっかけに結成された、性による差別の問題に関心のある学生のグループで、年齢もさまざま、女も男もいます。今回は、昨年12月からのモルガウの活動を報告したいと思います。

先程述べましたように、モルガウは去る6月1日、「ウィルあいち」のオープニングイベントに『CMの中のジェンダー』というテーマでワークショップを開きました。性による差別を私たちにとって身近な存在であるテレビCMを通して考えてみようというものです。

昨年12月からCMの調査を始め、その中にみられた性差別的なCMを、性別役割分業のCMと性の商品化のCMにわけ、それぞれを分析しました。すると、前者に関しては、家庭用品や教育関係には女性が多く登場しており、また、職場のシーンでは男性は重要なポストに就いているのに対して、女性は補助的な役割が与えられているCMが目立ちました。後者に関しては、女性のヌードや体の一部分をアップにするなど、女性をアイキャッチャーとして利用しているCMが見られました。いずれも、従来の女らしさや男らしさのイメージを助長させる可能性のあるものとして問題があると思われます。

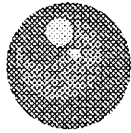
会場に来て下さった方からは、表現の自由についてや、なぜ女性は女らしい格好をするのか、海外のCMはどういうものかなど、さまざまなご意見やご質問をいただきました。この発表内容をまとめた報告書も作成しました。また、この研究は、各社新聞にも取り上げられ、「ワーキングウーマン」の合宿や、文部省委嘱事業の公開集中講座でも発表の機会をいただきました。

今後のモルガウの活動としては、10月27日の大学祭でバングラディシュの民芸品を販売します。収益金はバングラディシュの女性のための基金となります。

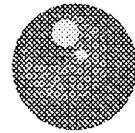
(現代社会学部2年)



(6月1日ウィルあいちオープニングイベントにて)



## 第6回国際・学際女性会議 オーストラリア、アデレード大学にて開催



國信潤子

国際・学際女性会議が1996年4月21～26日オーストラリアのアデレード大学で開催された。この会議は3年に一度開催され、世界中のあらゆる領域の女性学の研究者、教育者そして運動家が合流してその成果、課題を報告しあう会議で、ジェンダー・女性学研究者にとっては貴重な機会である。国際と学際というのはそういう意味である。今回は「地球規模の再構築」を基調テーマとし、その中には労働、人口移動、難民、性搾取の観光産業、技術、市場と国家、食糧危機、通商、AIDSなどがある。また基調テーマ以外のテーマも女性学、フェミニスト政治学、ジェンダーの視点からの社会構造分析、健康とセクシュアリティ、カイロ（1993年・世界人口会議）、コペンハーゲン（1994年・世界社会開発会議）、北京（1995年・世界女性会議）後の世界、持続可能な開発、先住民問題、文化表現と多彩であった。50ほどの全体会やセッションが同時進行し、日程は4日間9時～5時の間びっしりとあった。また早朝、夜には各種の文化的活動、見学なども連日組まれていた。

現在のオーストラリアの政治問題の一つとして先住民問題がある。開会式ではアボリジニの人々による伝統ダンスの後に先住民研究家で運動家でもあるマーシャ・ラングトン教授（North Territory University）が基調講演を行った。先住民の居住地の開発が生活様式を変容させ、伝統的宗教が否定され、国による先住民文化の排除が組織的に行われている実態の告発があった。そこには青年層の犯罪の増加、魔女狩りのような文化継承者の排除があるという。今回のオーストラリアでの会議の特徴は先進国における少数先住民との共存が苦悩に満ちたものであることを正直に明らかにした報告、研究が多くあったことである。

今回のもう一つの特徴はロシアからの若手女性研究者がアメリカの各種財団の助成を得て参加していたことだ。そのなかの報告の一つに職場におけるセクシュアル・ハラスメントが今まで語られない差別としてあったことを指摘し、告発が始まっているという報告があった。ロシアでは高学歴（大学卒）の女性の70%

は就職できない。そのため性的交渉を条件に職を与えられる事例の増加があるという。こうしたことは法令で禁止されていても確実に増加しており、法の実質的効果がみられない。この傾向に拍車をかけるのが自由経済への参加であり、企業は女性社員を25%以上は採用しないことを明言しているという。ロシアでは開放経済と女性差別が相補的關係にあることがみえてきた。

世界の再構築というテーマのもとで移住労働者問題は多く報告された。そのなかで私も東アジアにおける女性移住労働者問題を報告した。東アジアの特徴は、日本をはじめとするいくつかの先進産業国の急速な経済成長のために70年代後半から急速に開発途上国からの移住労働者が増加したことである。なかでも女性についていうならば日本には超過滞在女性が性産業に多くおり、それらの女性は韓国、フィリピン、タイなどから来ている。また台湾ではフィリピン、マレーシア等から女性工場労働者を組織的に受け入れている。香港ではメイド、子守などとして家事労働者がフィリピンから多く来ている。こうした国別に異なる状況のもとでも共通してみられるのが開発途上国のアジア女性であるが故の法外な低賃金、基本的人権・労働権の侵害である。さらに女性特有の性的虐待を受けているということである。

今回の会議の全体的印象は地球規模でみられる女性の労働、生活、家族、生殖の自己決定権などの社会的変化が当事者、またそれに近い女性研究者から生の声で報告されるので大いに刺激されたということである。

ぜいたくを言えばもう少し報告件数は減っても厳選された研究をじっくり時間をかけて聞きたかったということである。次回のこの会議は3年後つまり1999年にフィンランドで開催されることとなった。

（本学現代社会学部教授・本研究所所長）

## ジェンダー・女性学研究所主催特別セミナー 「ジェンダーの視点で広告、コマーシャル、視覚芸術を観る」

日時：1996年5月4日

講師：深澤純子(城西国際大学非常勤講師)

西山千恵子(目白学園女子短大講師)

視聴覚メディア；特に芸術作品といわれるものにおける性差別を深澤さんはスライドで見せながら解説。「見られる性」としての女の体のモノ化を紹介した。

また、西山さんは地方自治体が税金を使って芸術品を購入するが、多くの彫刻が女性裸体であり、公共の場にあることについて問題性を指摘した。夕方の特別セミナーだったが40名程度の参加者があり、熱心な討論が続いた。

## 女性学・男性学関連文献紹介

### 「男性学入門」

著者 伊藤公雄

作品社 刊 1996年8月

～男らしさのジレンマを読み解く～

男性学のフロンティアである伊藤公雄さんの手になる男性学入門書で、著者は日本で最初に国立大学で(私立大学を含めても)男性学という名を看板にあげた講座を開設した。伊藤さんには愛知淑徳大学にも非常勤講師としておいでいただいております、またジェンダー・女性学研究所の非常勤運営委員もお願いしている。

80年代に既に90年代は男性学が必要なときだと宣言をしてまさにそうなりつつあるようだ。女性が家庭内役割のみを生きがいとする社会ではなくなり、社会進出し、経済自立が人権の一部であることが認識されるようになってみると、男性側から「家事、育児をせずに働くために外にでる女なんて」という声がしきりにあがるようになってきた。一方そういう男性自身はリストラにあって生きがいを喪失、あるいは過労死、また濡れ落ち葉族、生活自立のできない人、仕事以外世間を知らない人といった指摘もされている。しかし男たちはもっと自由に「男らしさ」という鎧を脱ぎ捨てていいのだ。そしてもっと自分らしい生き方を探求して、自分ならではの人生を創っていいのだと思わせて

くれる一冊だ。若い学生たちにそして人生の黄昏どきにある男性たちにも、是非一読をおすすめしたい本だ。

### 「現代社会とジェンダー 女性が解放する社会」

著者 水田珠枝・安川悦子他

ユニテ 刊 1995年

本書には、水田珠枝「フェミニズムと歴史認識—近代化の評価をめぐる—」、安川悦子「日本型企業社会と家族のイデオロギー」をはじめとする13の論文が収録されている。これらのほとんどは、「現代化と女性解放」というテーマで南京において行われたシンポジウムの日本側参加者の報告をもとに執筆したものである。「南京シンポジウム」というのは、江蘇省社会科学院のメンバー8名と日本からの「現代フェミニズム研究会」を中心としたメンバー10名で行われたもので、今回で7回目になる。シンポジウムという性格上、報告者の立場も方向も多様であり、したがって本書に収められている論文も多様な立場から書かれている。それだけに、近代社会、家族、労働、テクノロジー等の評価をめぐる、フェミニズムにおいて、あるいは社会科学において何がいま論点になっているかが見えてくる。

## 新刊・新着お勧め図書

\*これらの本はジェンダー・女性学研究所で貸し出ししています。

『きっと変えられる性差別語』上野千鶴子+メディアの中の性差別を考える会編 三省堂 1996

『結婚しないかもしれない症候群【男性版】』谷村志穂 主婦の友社 1996

『女性がつくる21世紀 私たちの北京「行動綱領」』清水澄子、北沢洋子共著 ユック舎 1996

『セクシュアリティ』ジェフリー・ウィークス著 上野千鶴子(監訳) 河出書房新社 1996

『性の商品化 フェミニズムの主張2』江原由美子編 勁草書房 1995

『よむ映画』鈴木陽子 西田書店 1992

『レイプ・クライシス この身近な危機』東京・強姦救済センター編 学陽書房 1990

### ♀フェミニズムの視点からの絵本♂

『トンドレラ姫物語』バベット・コール著 上野千鶴子(訳) 松香堂 1995(英語版もあり)

『シンデレラ王子の物語』バベット・コール著 上野千鶴子(訳) 松香堂 1995(英語版もあり)

ジェンダー・女性学研究所 今後の活動予定・お知らせ

ワークショップ  
青年男女の開発における役割  
～ジェンダーの視点～

主催：ジェンダー・女性学セミナー実行委員会

ワークショップ発題者：

川原啓美 アジア保健研修所(AHI) 所長、医師  
ルマナ ナヒド スバハン

法学、国際関係専門家 バングラディシユ

吉田美穂 グループWEAVE 開発教育NGO

コーディネーター：

國信潤子 愛知淑徳大学現代社会学部教授、  
愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所所長

日時：1996年12月14日(土) 15:00～18:00  
場所：愛知淑徳大学国際交流会館(1-HOUSE)  
参加費：無料  
募集人員：50名(原則として18～25才の青年男女  
を対象とします。)  
申し込み締め切り：1996年11月30日

日本女性学会 秋季大会のお知らせ

開催日時：11月23日(土)・24日(日)

会場：愛知淑徳大学

シンポジウム：

日時：11月23日 13:00～17:00

テーマ：「フェミニズムと政策決定過程」

パネリスト：相内真子・岩本美砂子・剣持一巳

個人研究発表・ワークショップ：

日時：11月24日 10:00～15:00

シンポジウム  
「青年男女の共同参画をめざして」

主催：ジェンダー・女性学セミナー実行委員会

基調講演：女子学生はなぜ採用されないのか？  
ー日本企業のジェンダー構造とその変革の道ー  
基調講演講師：

大沢真理 東京大学社会科学研究所助教授

シンポジウム：

～女子学生の就労と男性の生活自立への道～  
パネリスト：

大沢真理

上村千賀子 国立婦人教育会館事業課長

青年男女各2名

コーディネーター：

國信潤子 愛知淑徳大学現代社会学部教授、

愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所所長

日時：1997年2月15日(土) 13:00～16:00  
場所：愛知県女性総合センター ウィルあいち  
第一・第二セミナー室  
参加費：無料  
募集人員：140名(原則として18～25才の青年男女  
を対象とします。)  
申し込み締切：1997年1月24日(金)

申し込み・問い合わせ先

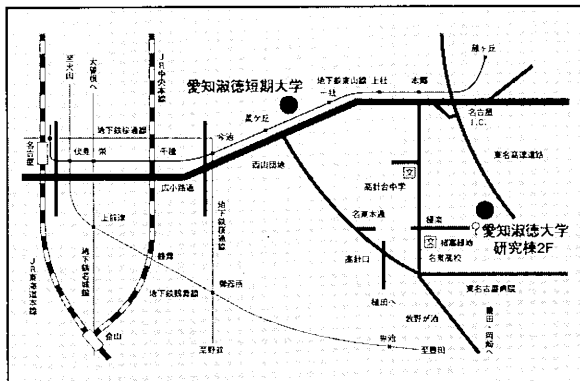
愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所  
〒480-11 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9  
TEL:0561-62-4111 FAX:0561-63-9308  
ハガキ又はFAXに、住所、氏名、電話番号、  
年齢、勤労者か学生の別を記入して  
お申し込み下さい。

ASU大学図書館にジェンダー・女性学関連図書コーナー開設

「キーワードは男女平等」ということで、新たに図書館に男女の平等を考えるための文献を集めた特別コーナーを設置しました。貸出もしています。是非ご利用下さい。

\*ジェンダー・女性学研究所でも、関連図書の貸出をしています。

■研究所への交通マップ



● 編集後記 ●

文部省の委嘱事業のひとつ、2泊3日の集中講座が終了しました。他大学、多方面からたくさんの参加者があり、その反響の大きさにスタッフ一同驚いています。またそれだけに、責任の重さも痛感しています。後半の事業を成功させ、今回の事業を実り豊かなものにするために身を引き締めてやっていきたいと思っています。なお、事業実施にあたっては、県の生涯学習課、本学総務部をはじめ学内外の多くの方々のご尽力をいただいております。この場をかりて感謝申し上げます。(1)

運営委員：石田好江、大野光子、國信潤子、秦喜美恵  
富安玲子、渡邊かよ子  
非常勤運営委員：伊藤公雄(大阪大学)